

タイ諸語音韻体系に対する一考察

『長田夏樹論述集（下）』第7章

（原載：『神戸外大論叢』第1巻第2・3号，1949年12月）

この論文は泉井久之助『比較言語学研究』（創元社，1949年6月）に収める「百夷館雑字並に來文の解説」279-295頁に見えるタイ諸語の子音の比較に対し別解を提出したものである。その主な点はタイ祖語における有声音の推定音価に関する問題であり、齒音を例としてシャム語の正書法と対照して示すと以下の通り（Maspero, H. *Contribution à l'étude du système phonétique des langues thai*, BEFEO, XI, 1911; Li, F. *A Handbook of Comparative Tai*, The University of Hawaii Press, 1977）：

	Maspero	泉井	長田	Li
ʎ	ḍ	d	d	?d
n	d	d ₀	d ^c	d

ここで、マスペロは ḍ と b- (b の上に-を付けた記号、シャム語の正書法で示すと u) に対して *des douces non sonores* (即ち無声軟音、IPA では適当な記号がないが、一般に無声子音は *fortis*、有声音が *lenis* であることからして、d の下に無声化の記号。を付して表記できようか) を推定している (p.166)。泉井の d₀ は無声化の記号を d の真下につけたものだが、「無声的にして非帯氣的な軟音 d₀。(いわゆる《*d dévocalisé*》)」を表す (pp.279-280)。

さて、マスペロはシャム語で ʎ に対して l、u に対して m が現れることや、更に声調の陰調（タイ諸語の場合は有気性でも分かれる）と陽調の対応関係も定立した上で、ʎ の系列が陰調に現れることから上記の推定をなしたものであり、李方桂が *preglottalized* を再構するのも同様の理由からである（なお n の系列は陽調に現れる）。泉井論文は諸言語の語例に現代声調調類は表示するものの、タイ祖語レベルでの調類や現代語での陰陽調は明示しておらず、長田論文は語例に声調を表示せず事実上声調を度外視している。タイ諸語の比較の内的証拠からはマスペロ・李方桂説に軍配が上がる（また *implosive* は m, l に変化しやすい）。

長田論文の根拠は上古漢語との対応にあり、随所に対応語例が提案されていて有益である。ただ、カールグレンの上古音の全濁音の音価である有聲有気音は中古音の音価をそのまま持ち上げたもので、マスペロが梵漢対音から示したように有聲無気音を推定するのが現在の主流となっている。しかし、ʎ の現代シャム語の音価は d であり、n も現代シャム語では声調に関わりなく一律無聲有気音となっているから、陰陽調分裂が生ずる直前の音価としては有聲有気音を推定するのが妥当であり、長田説はタイ祖語から現代シャム語に至る中間段階としては成り立つものと見られる。 (遠藤光暁)